

<資料>

## 助動詞 *werden* の二重用法について

About the double-used Auxiliary Verb *werden* in German

板山 眞由美\*

Mayumi Itayama

助動詞として用いられる *werden* は、動詞の不定詞と結びついて未然の事柄や話者の推量を表す。また動詞の過去分詞と共に用いられて、いわゆる動作受動と呼ばれる受動文をつくる。この二つの文法形式が、ひとつの文の中で重ねて用いられる場合について、資料をもとに、その理由や条件を整理して、今後の *werden* 研究への手がかりとしたい。

キーワード：動作受動、動詞の不定形と結びつく *werden*、*werden* の二重用法、時間指示、話法性

### I. はじめに

筆者は、*werden* と動詞の不定形がつくる構文の意味用法を研究する過程で、*werden* が同様に助動詞として用いられ、動詞の過去分詞と結びついてつくりなす受動文に注目するようになった。いわゆる動作受動 *werden*-Passiv（以下では受動文とする）については、文法化された形式とはいえ *werden* が持つ完了的・起動的意味が、他の文要素や文脈との関わりの中で、時には保持されるが、場合によっては背景に押しやられる。文の時間指示という観点から特に重要なのは、過去分詞の形で用いられる動詞の動作態 *Aktionsart* である。加えて他の文要素、特に主語の数、時間や様態を表す副詞や前後の脈絡などが、文の表す事柄が発話の時点で実現しているかどうかの解釈に、複合的に関与している。これらふたつの、共に *werden* が助動詞として用いられる構文、および文法形式において興味深い点は、同時に用いられることが極めて少ないという傾向である。筆者は 1995 年京都で開催された夏期言語学ゼミナールの際に、招待講師 Joahim Ballweg 教授から「動作受動では、Futur としての *werden* は剩余的 *redundant* である」という指摘を受けた。Helbig/Buscha の文法書 *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. (1986:161) にも、動作受動の未来時制は比較的まれである、との記述があるが理由は述べられていない。確かに筆者がこれまで集めた資料においては、この形が現れる頻度が極めて少なかったため、回避する傾向が見られると指摘してきた。しかし今回取り上げる Kästner の書簡集では、不定詞と共に用いられる助動詞 *werden* と、受動文をつくる *werden* が重複して用いられる、いわば「二重用法」が受動文

---

\*流通科学大学非常勤講師、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

の文例 212 中、12 例見られ、一概に回避されているとはいいがたい。同じく助動詞である話法の助動詞 Modalverben と受動文との共起は 31 例 (müssen 10 例、sollen 10 例、können 8 例、dürfen 2 例、wollen 1 例) であった。本稿ではこの二重用法を取り上げ、時間指示や話法性との関連を、当該の文が現れる前後の文脈も考慮しながら調べることにより、werden が敢えて重ねて用いられる理由・動機、その条件について考えたい。

本稿で資料とした文例は、Erich Kästner が母親に宛てて書き送った手紙を集めて編集された「書簡集」*Mein liebes, gutes Muttchen, Du!* (Albrecht Knaus Verlag, Hamburg 1981) から得た。文体は基本的に書きことばではあるが、その表現の多くから Kästner が母親と直接ことばを交わしているかのような印象を受ける。晩年 Kästner と生活を共にした女友達 Luiselotte Enderle は、母親への葉書や手紙を直接 Kästner から託され、1981 年に「時期が来たと思う」として出版を決めた。その緒言の冒頭に挙げられた母親のことば “Mein Junge verschweigt mir nichts.“ 「息子は私に包み隠さず何でも話してくれます」からも、この息子と母親の間の固い絆と信頼関係がうかがえる。その絆は、幼い頃から晩年に至るまで変わることはなかったという。

## II. 受動文と時間指示

本題に入る前に、受動文における時間指示の解釈について、文例を示しながら整理しておく。

### 1. 後時的用法

過去分詞として表れる動詞の動作態 Aktionsart が完了的 perfektiv であるとき、事柄は当該の文が書かれている時点で、通常まだ実現していない。即ち後時的に解釈される。文例末のカッコ内は「書簡集」のページ数を示す。斜体は筆者による。略語は原文にもとづく。

- 1) Abends mit John *wird* der erst Akt beendet. (27)

夜、ヨーンと一緒に第一幕を仕上げる。

- 2) Na, morgen früh *wird* erst mal bißchen ausgeschlafen. (33)

そうだ、明朝は先ず少しばかりしっかり睡眠をとろう。

### 2. 同時的用法

過去分詞として現れる動詞の動作態が非完了・継続的 nicht perfektiv であり、さらに他の文要素や様態を表す副詞・副詞規定や、前後の文脈などの脈絡が、その時間関係に手を加えない限り、事柄は発話の時点で既に実現している、ないしは起こりつつある。即ち同時的に解釈される。

- 3) Denn ich *werde* post numerand bezahlt, kriege also das Februartgeld erst am 1. März. (15)

というのも給料は後払いでもらっているからだ。つまり 2 月分は 3 月 1 日になって支払われるんだ。

- 4) Zwischen Weller u. Kiepenheuer *wird* nach wie vor korrespondiert. (106)

ヴェラーとキーペンホイヤーの間では依然として手紙がやり取りされている。

### 3. 時間指示を導くその他の要因

以下の文例で用いられている動詞 *essen*, *spielen* は非完了的動詞ではあるが、他の文要素によって、文が述べている事柄が、現在の事柄ではないことが示されているため、文自体としては後時的に解釈される。文例中のカッコ内は筆者による。

- 5) Heut zum Nachtdienst *werden* die ersten (Äpfel) zur Probe gegessen. (38)

今日、夜勤の時に先ず何個か試しに食べよう。

- 6) Nun *wird* «Pünktchen» am Sonntag gespielt.

さて「点子ちゃん」は日曜日に上演される。

また完了的動詞の場合でも、主語が複数の場合や、次の文例に見られる *alles* のように、全体を表す語である場合、事柄が繰り返して起きているという反復的 *iterativ* な解釈となる。即ち同時的な事柄を表すと理解される。

- 7) Filme, Stücke etc., *alles wird* verboten, dann erlaubt, dann wieder verboten. (200)

映画、戯曲、その他何もかもが禁止され、それから許可され、そしてまた禁止されている。

受動文の文例 212 例のうち、定形で現われる *werden* の直説法現在形は 150 例、過去形が 26 例、現在完了形 23 例、接続法 I、II 式は合わせて 13 例であった。

## III. 二重用法の文例

今回の資料では、以下の 12 例に二重用法が認められた。「書簡集」での時系列順に挙げる。

文例中のカッコ内は筆者による。代名詞や場所、略語は、可能な範囲で、指し示されている名詞や人名、場所を補った。後に言及する話法詞や副詞、副文などは下線で強調した。

- 8) Vielleicht *wird* dabei ein bißchen auf die NLZ (Neue Leipziger Zeitung) Bezug genommen *werden*. (53)
- 9) Er (Prof. Steiner-Prag) sagte gestern zu mir: das sei ein Auftrag für die Internationale Buchausstellung und *werde* natürlich honoriert *werden*. (56)
- 10) Der «Emil» wird wohl bald ausverkauft sein und *wird* vielleicht noch vor Ostern neugedruckt *werden*. (117)
- 11) Na, *wird* schon gekauft *werden*. (123)
- 12) Der Film *wird* wohl auch Anfang der Woche fertig sein und wieder durchgesprochen *werden* müssen. (145)

- 13) Also, im Winter *wird* allerlei verdient *werden*, wenn's nicht drunter und drüber geht. (158)
- 14) Obwohl ich seit Tagen wie ein leicht Verrückter um die «Pünktchen»-Aufführung kämpfe, *wird* das Stück überhaupt nicht mehr gespielt *werden*. (178)
- 15) Ich fürchte, es *wird* nie aufgeführt *werden*, aber schreiben werde ich's trotzdem. (183)
- 16) Da *wird* wohl Verschiedenes ausfallen u. morgen nachgeholt *werden* müssen. (228)
- 17) Berlin *wird* wohl kaum geräumt *werden*. (272)
- 18) Es *wird* bestimmt bald alles erleichtert *werden*. (278)
- 19) Da (in München) *wird* er («Emil») bayrisch gespielt *werden*. (286)

これらの文例から、いくつかの傾向が指摘できる。

- ① 定形で現れ、動詞の不定詞と結びつく *werden* を取り除いても、時間指示に変わりはない。過去分詞の形で現れる動詞の動作態、時を表す副詞や副詞規定 *bald*、*im Winter*、*morgen* などが時間関係を示している。
  - ② 文中に話法詞が多く用いられていて、話者の推量、主観的な判断であることが明示されている。その内容が肯定的であれば「期待」、否定的であれば「不安」や「心配」が表明されていると考えられる。  
wohl (3 例)、vielleicht (2 例)、bestimmt (1 例)、schon (1 例)
- 10) Der «Emil» *wird* wohl bald ausverkauft sein und *wird* vielleicht noch vor Ostern neuge-druckt *werden*. (117)
- 「エーミール (と探偵たち)」はきつとすぐに売り切れになるから、多分復活祭の前にも再販されるだろう。
- ③ *wenn* で導かれる条件を表す副文、及び逆説の接続詞 *obwohl* に導かれる副文、それらと話者の判断を示す主文との組み合わせが、各 1 例ずつ見られる。
- 13) Also, im Winter *wird* allerlei verdient *werden*, *wenn's nicht drunter und drüber geht*. (158)
- だから、冬にはあれこれ収入があるだろう、もしゴタゴタがなければの話しだが。
- ④ 否定的な内容の事柄が起こることを「恐れる・不安に思う」(*ich fürchte*) という導入の文が *werden* を用いた文に先行している。
- 15) *Ich fürchte*, es *wird* nie aufgeführt *werden*, aber schreiben werde ich's trotzdem. (183)
- それは決して上演されないのではないかと心配だ。それでも私は敢えて書く。
- ⑤ 次の 2 例は、話者の主観的な判断ではなく、「～されることになっている」という予定が表わされている。9) は主語 *er* が指し示すシュタイナー・プラーク教授のことばを伝えている。
- 9) *Er* (Prof. Steiner-Prag) *sagte* gestern zu mir: das (eine Broschüre) sei ein Auftrag für die

Internationale Buchausstellung und *werde* natürlich honoriert *werden*. (56)

彼は昨日私に次のように言った。これは国際書籍展に向けての注文で、もちろん謝礼が支払われるだろうと。

19) Da (in München) *wird* er (《Emil》) bayrisch gespielt *werden*. (286)

そこでは(「エーミール(と探偵たち)」は)バイエルン方言で上演されるだろう。

12 例中、⑤に挙げた 2 例を除いた 10 例は、話者の主観的な判断や推量の表明であると解釈される。話者の主観的な判断・推量であることを示す話法詞や導入文が用いられ、話法性が強く感じられる。書き手の期待や不安が *werden* を敢えて重ねて用いることにより、よりはっきりと表明されていると考える。一方、⑤に挙げた文例では、話者の主観的な判断ではなく、後時的な未来の事柄を予告するという意味で、*werden* が持つはたらきの性質は異なる。

時間指示に関しては、定形で現れる *werden* を取り除いても、文全体としての時間関係に変わりはなく、その意味では剩余的であると言える。

#### IV. おわりに

本動詞として用いられる *werden* との二重用法については、本論集第 24 巻第 2 号(2012 年 1 月)に発表した「資料」の中で触れた。今回の整理結果と比較すると、どのような差異が見られるだろうか。またテキストの種類によって、二重用法の頻度や、現れる環境・条件が変わると予想される。今回は取り上げなかったが、二重用法を導く理由として、前後の文を含めた構文的な動機が存在することもありうる。文の長さも関わっているかもしれない。二重用法という観点からの検証は、助動詞・本動詞の枠を超えた *werden* 研究への、新たな手がかりとなろう。